

近代藝術の帰趨、モダニズムを超えて

～ 現代藝術の論点

(1945～)

サウンドデザイン演習
女子美術大学 石井拓洋
takuyo.Ishii (a) gmail.com

2019

0. 前回の復習

西欧近代主義と藝術の関係

「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

村田誠一 (1999)「近代の終焉? : 芸術的表現の可能性と限界」、神林恒道ら編『芸術における近代』
p.242]

「近代」とは？

きんだい 【近代】 modern age

中世
↓
近世

11C頃 「封建社会」
17C頃 「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代

18C末 「フランス革命」
「市民社会」の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
 - 合理的 **理性** を尊重し、**進歩主義** を標榜をした
 - 理性の追究 によって、**宗教的権威** や **王侯貴族に抵抗** した
 - 権威から自立し、自由と平等を有する個人、「市民」の誕生
 - 成果はフランスの『**百科全書**』（**ディドロ**ら編, 1751-80）に編纂
-
- 啓蒙思想が「近代」を導いた

啓蒙思想の性格： つまり「西欧近代」、「近代藝術」の性格

- **西欧中心主義**

西欧こそが世界で最も進んだ文明であるという考え

- **要素還元主義**

物事 (藝術を含む) の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
→ 物事を細かく区分しようとする考え

- **進歩主義**

新しいことは良いことだとする考え

- **人間中心主義**

人間は科学によって、自然を制御することができるとする。〈自然 vs 精神 (人間の本质)〉の二元論。

西欧近代主義と藝術の関係

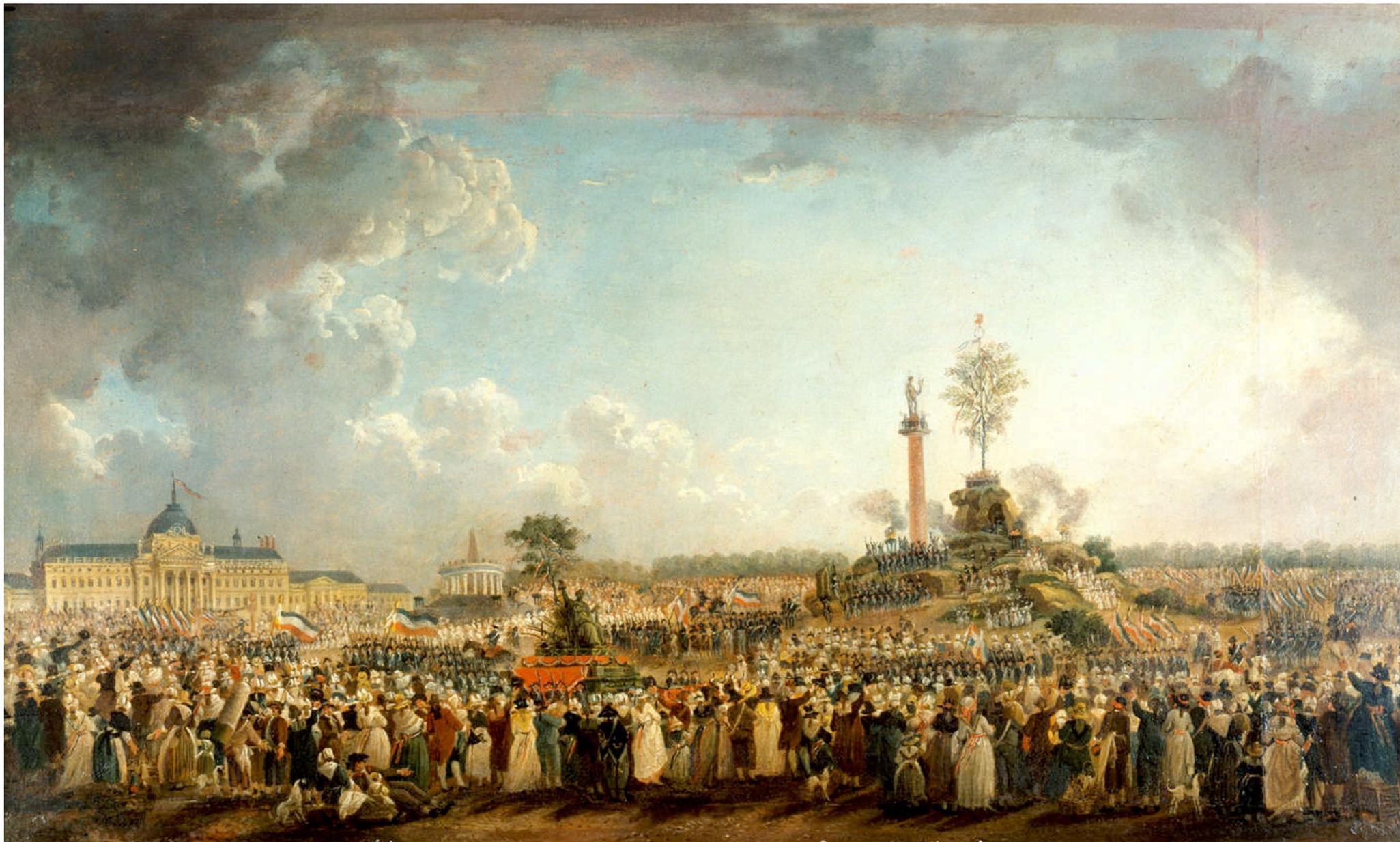
新たに誕生した国という形態は、「啓蒙思想にみあう宗教」を求めた。

「それを作りあげるための拠り所として、白羽の矢が立てられたのが、アルス※（科学、技術、芸術）であった。

したがって、近代ではこれらへの価値付けが高くなる」

松宮秀治 (2008) 『芸術崇拜の思想』 白水社、p54-55

※ ラテン語 ars。「術」の意味。手段、方法、手だて。英語は art。



「最高存在の祭典」（フランス革命後、キリスト教を否定し、フランスで人為的につくられた合理的な人工的宗教の祭
“ Festival of the Cult of the Supreme Being,” 1794

祭典の演出は画家のジャック＝ルイ・ダヴィッド

https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/19/F%C3%A0te_de_l%27Etre_supr%C3%A0me_2.jpg

西洋近代主義と藝術の関係

「ヨーロッパの『近代的』芸術観において、、、

創造性こそは芸術家の本質をなしている。

だが、歴史を振り返るならば、キリスト教的伝統においては

『創造する』という述語はただ神にのみ帰せられ」るべきものである。

「とするならば、創造する主体としての芸術家と言う概念の成立には、

芸術家が何らかの仕方で神と類比的な存在として捉えられることが必要であった、

という予想が成り立つ」

西欧近代主義と藝術の関係

「啓蒙主義とはまさしく人間を『神』とする思想だった」

松宮秀治『芸術崇拜の思想』pp. 80-82.

「『藝術家』とは(※啓蒙思想に導かれて)理念的にはみずから神となって、
自己の作品を通じて、歴史と社会がいまだ発見しえなかった新しい価値を創出する
『創造者』となることである」

〔松宮：67〕

近代藝術の性格 - 自律化・純粹化

近代藝術が「自律化・純粹化」を志向するにいたる2つの要因

1. 啓蒙主義の「要素還元主義」的性格のあらわれ

1. 本質主義 (本質の存在を信じ、それを徹底的に追究。不純なものの排除)
2. カント → ハンスリックの自律美学
3. 人間による人間の知恵の徹底的追究としての「藝術の非人間化」へ

2. 「ドイツ・ロマン主義」的性格のあらわれ

1. 国民国家統治のための、既存宗教に代わる、新しい精神的支柱の要請
2. 「科学・藝術」への着目。特にドイツは精神的支柱としての「藝術」を待望。
3. 藝術家の神格化 (神に対抗する、近代人の「創造性」への追究 = 「天才」。神なる人間。)
4. 俗なる人間の領分を超える領域 = 「藝術」としての「藝術の非人間化」へ

近代藝術の性格 - 自律性

(ドイツ・ロマン主義的性格から)

新たなる神として位置づけられた「藝術」は、超越的であり、人間の世界から隔絶された、普遍なる存在であることが求められた。ここにおいて、「藝術の自律性」が問われる所以の一つが見いだせる。

たとえばベートーヴェンは、このような藝術を具現化しうる「天才」として代表的な存在となる。かくして、藝術は自律化の道を辿り、その具体的規範は「音楽」に求められることになる。

西欧近代主義と藝術の関係

(ドイツ・ロマン主義的性格から)

「すべての芸術は音楽の状態を憧れる」

ウォルター・ペイター (文学者、批評家) 1877年

(ウォルター・ペイター「ジョルジョーネ派」『ルネサンス:美術と詩の研究』富士川義之訳、東京:白水社、1877年=1993年、141頁。)

※ 音楽は外界の模倣 (古代ギリシャ以来の藝術理念 = ミメーシス) に表現が依存せず、たとえば器楽曲のように、人間の世界を超越するかのよう、作品自らの形式のうちに逐次に内容を表現しうる表現とみたため。

本日の話の流れ

1. 「啓蒙思想への懐疑」
～「西洋の没落」を予言する思想家たち
2. 「近代芸術の帰趨」
～「近代芸術」の不可避な限界とは？
3. 「モダニズムを超えて」
～ 現代藝術の論点

1. 啓蒙思想への懐疑

～「西洋の没落」を予言する思想家たち

「われわれはわれわれ自身を理解しない。

われわれはわれわれを取り違えざるをえない」

フリードリヒ・ニーチェ (1844=1900) 『道徳の系譜』 8

人間は世界を正しく認識できるのか？

- ・ なぜ「世界を正しく認識」する必要があるのか？

人間は世界を正しく認識できるのか？

- ・ なぜ「世界を正しく認識」する必要があるのか？

→ もし「世界を正しく認識」できたなら、
世界のあり方を人為的に操作できるから。

啓蒙思想によればそれが可能なはずであった。

人間は世界を正しく認識できるのか？

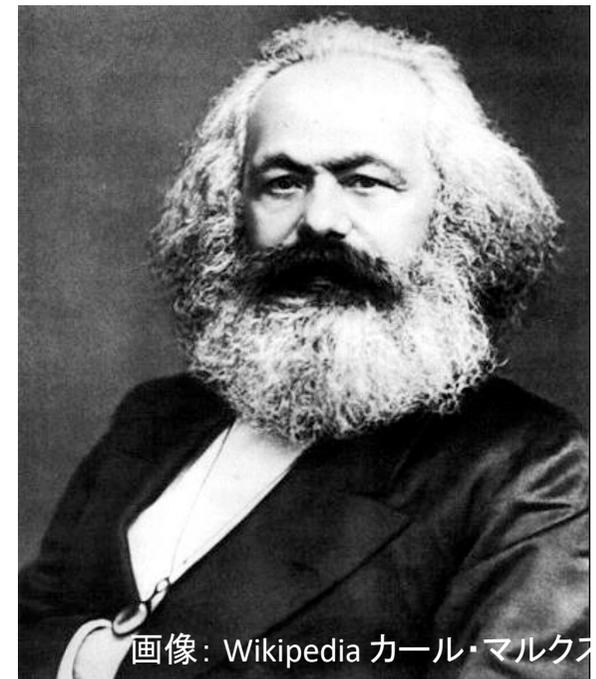
- ・ 世界を〈正しく認識〉することの含意
 - 人間の **認識能力への信頼感**
 - **唯一絶対の〈正しい世界認識〉**への到達の期待感
(宗教によらずに)

しかし、思想家たちは、、、

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)



画像: Wikipedia カール・マルクス

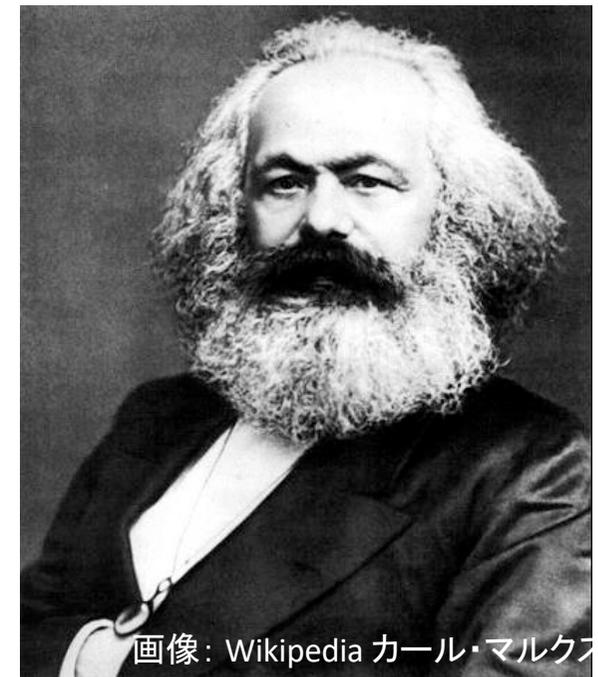
人間は世界を正しく認識できるのか？

- ・ カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)

人間は『どの階級に属するか』によって、
『ものの見え方』が変わってくる。

→ 人間の認識は普遍的ではなく、
置かれた状況や他との関係性によって変化する

- ※ 関係論の萌芽 (非本質主義)。 実体論 \leftrightarrow 関係論。
- ※ その経済理論よりも、むしろ、マルクスの関係論的視座が着目され、今日、英語圏の文化研究 (芸術研究) の基調として存在感をもつ。



画像: Wikipedia カール・マルクス

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ ジグムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939, 独)



画像: Wikipedia シグムント・フロイト

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ ジグムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939, 独)

人間が**直接知ることのできない無意識の領域**が、
人間の考えや行動を**支配**する

→ **人間は人間自身のことも知ることができない**



画像: Wikipedia シグムント・フロイト

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ マルティン・ハイデガー Martin Heidegger (1889-1976, 独)



画像: Wikipedia マルティン・ハイデガー

人間は世界を正しく認識できるのか？

- ・ マルティン・ハイデガー Martin Heidegger (1889-1976, 独)

人間は居心地が良い状態にいと、
大衆として世間に埋没し、彼本来のあり方を見いだせず「頹落」(墮落)する。
一方で、居心地が悪くて、**死が身近なほど不安な状態にいと、**
自らを自己自身へとふりむかせ、**本来的な自己を「取り戻す」。**

- "ありのまま" にしていれば墮落する
- = 人間が意のままに生きることへの不信
(主体性批判)



画像: Wikipedia マルティン・ハイデガー

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913, 仏)



画像: Wikipedia
フェルディナン・ド・ソシュール

人間は世界を正しく認識できるのか？

- フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913, 仏)

人間の考え方は、使用している **言語規則の範囲**で制限されている (= **記号論**)。

ex.) 虹の色

日本 (赤、**橙**、黄、緑、青、**藍**、紫) 7色

ドイツ (赤、黄、緑、青、紫) 5色

→ 自国語の **単語の有無**で世界認識が左右されてしまう。
つまり、それほど、人間の認識とは **自由**ではなく、
また、物事を **正確に語る**ことができない。



画像: Wikipedia
フェルディナン・ド・ソシュール

人間は世界を正しく認識できるのか？

その後、西欧が直面した、啓蒙主義への懐疑の実際的局面

- **第一次世界大戦 (1914 - 1918)**
- ナチスの蛮行 (1933頃 - 1945)
- 核兵器の開発 (1942 -)、福島 (2011)

啓蒙主義（西欧の知性）の徹底が、むしろ惨劇を引き起こしてしまったことへの落胆。

西洋の没落を西洋人自身が予言 → シュペングラー『西洋の没落』 (1918)

人間は世界を正しく認識できるのか？

- マックス・ホルクハイマー Max Horkheimer (1895-1973, 独)
- テオドール・W・アドルノ Theodor W. Adorno (1903-1969, 独)

著作 『啓蒙の弁証法』(1947)

「古来、進歩的思想という、もっとも広い意味での啓蒙が追求してきた目標は、人間から恐怖を除き、人間を支配者の地位につけるということであった。しかるに(※=なのに)、あます所なく啓蒙された地表は、今、勝ち誇った凶徴(※=凶を示すもの)に輝いている。

啓蒙のプログラムは、世界を呪術から解放することであった(※はずなのに、なぜかそうではない)。神話を解体し、知識によって空想の権威を失墜させることこそ、啓蒙の意図したことであった(※はずなのに、なぜかそうではない)。」

(※ 理性的に大真面目に思考するほど、その結論の結果はよくない。結論はだせない)

2. 近代芸術の帰趨

～「近代芸術」の不可避な限界とは？

近代藝術の性格 - 自律化・純粹化

- ・「西洋の近代藝術を規定している根本動向は自律化・純粹化の運動であると言われる」

国安洋 (1991) 『〈藝術〉の終焉』 p.30。

- ・「『近代芸術』の用意をし、いわばそのための母胎をなしているあの運動の一つの原初現象は、完全に『純粹』になろうとする、芸術、全芸術の努力である。その場合、純粹とは --すぐわかることだが-- なによりもまずあらゆる他の諸芸術の要素や成分にとらわれぬ自由な存在ということに他ならない」

ハンス・ゼーデルマイヤ (1960=1962) 『近代芸術の革命』石川訳、p.21。

- ・ じりつ【自律】 autonomy
 - 自分で自分の行為を規制すること。外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること。[広辞苑]

「芸術の非人間化」と純粹化の徹底

(啓蒙思想の要素還元主義性格から)

「作品はそれ自身のために聴かれねばならぬ〔略〕。

音楽が一つの気分を我々に引き起こすための単なる手段として、
付随的にまた装飾的に応用されるようになるや否や
音楽は純粹芸術として作用することをやめる」

→ ※ 音楽において情感は不純な要素なので、それを排して
より純粹な音楽をめざすべき。

エドゥアルト・ハンスリック 『音楽美論』 (1854=1960) p.154

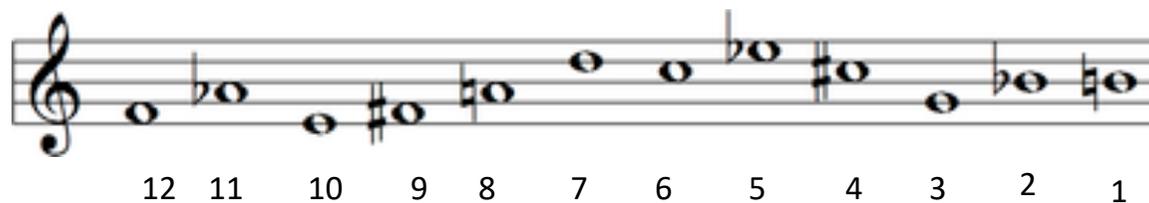
「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

(啓蒙思想の要素還元主義性格から)

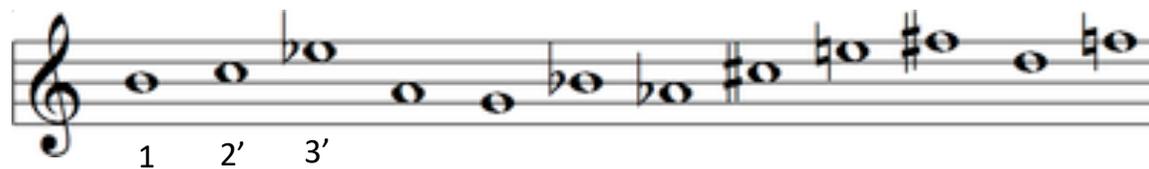
●「調性音楽」から「12音音楽」へ



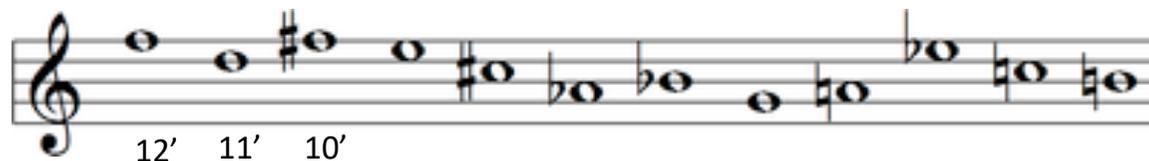
1オクターブ内の12個の音を重複なく並べて基本音列をつくる。嬉しい、悲しいなどが感じられないように並べる。



基本音列を逆行



基本音列の最初の音を軸にして、音程関係を反行



基本音列を逆行+反行

(楽譜: wikipedia「十二音技法」より)

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

(啓蒙思想の要素還元主義性格から)

● 「調性音楽」から「12音音楽」、「セリエズム」へ



《ピアノ組曲》
Op.25 (1923)



画像: Wikipedia
アルノルト・シェーンベルク

アルノルト・シェーンベルク
(1838-1889, オーストリア)



《音価と強度のモード》
(1949)



画像: Wikipedia
オリビエ・メシアン

オリビエ・メシアン
(1908-1992, フランス)

※ 12音音楽を「進歩」させた
「トータル・セリエズム」の
技法で書かれた曲

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

自律藝術の「要素還元主義」的性格の系譜

カント (哲学者, 18C) → ハンスリック (音楽批評家, 19C) → グリーンバーグ (美術批評家, 20C)

「平面性、二次元性は、絵画が他の芸術と
分かち持っていない唯一の条件であった」

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg
(1909-1994, アメリカの美術批評家)

「平面性、二次元性は、絵画が他の芸術と
分かち持っていない唯一の条件であった」

(グリーンバーグ「モダニズムの絵画」(1965)より)



クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg

(1909-1994, アメリカの美術批評家)

【彼の主張】

- ・ かつてそうであったように、絵画は崇高であるべきである。
- ・ しかし、近代以降、それは「たんなる娯楽となって、質が低下していった」
- ・ 絵画の危機を救うために、〈絵画固有の要素〉を明確にするべきである。
- ・ 三次元性や色は彫刻に固有な要素である。物語性は文学に固有である。
- ・ なので、全ての三次元性(イリュージョン)は絵画の本質ではない。人物・神話も不要。
- ・ 二次元性、つまり「平面性」、そのような「形式」こそが〈絵画固有の要素〉である。
- ・ 絵画は「平面性」を追求すべし。過去の名作の水準を維持するために。

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg
(1909-1994, アメリカの美術批評家)

「平面性、二次元性は、絵画が他の芸術と
分かち持っていない唯一の条件であった」

(グリーンバーグ「モダニズムの絵画」(1965)より)



ユダヤ教の「偶像崇拜の禁止」という視点も考慮したい。グリーンバーグはユダヤ人であった。そしてアメリカがユダヤ移民の国であることも考慮したい。

さらにまた、冷戦時代のアメリカが文化的側面からも覇権を握るための戦略があり、この芸術理論を後押しし、CIAやその人脈との繋がりがあるMOMAを中心とした国家的プロジェクトとしてすすめられたと考察する学説もある(「文化冷戦」の視点)。

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg
(1909-1994, アメリカの美術批評家)

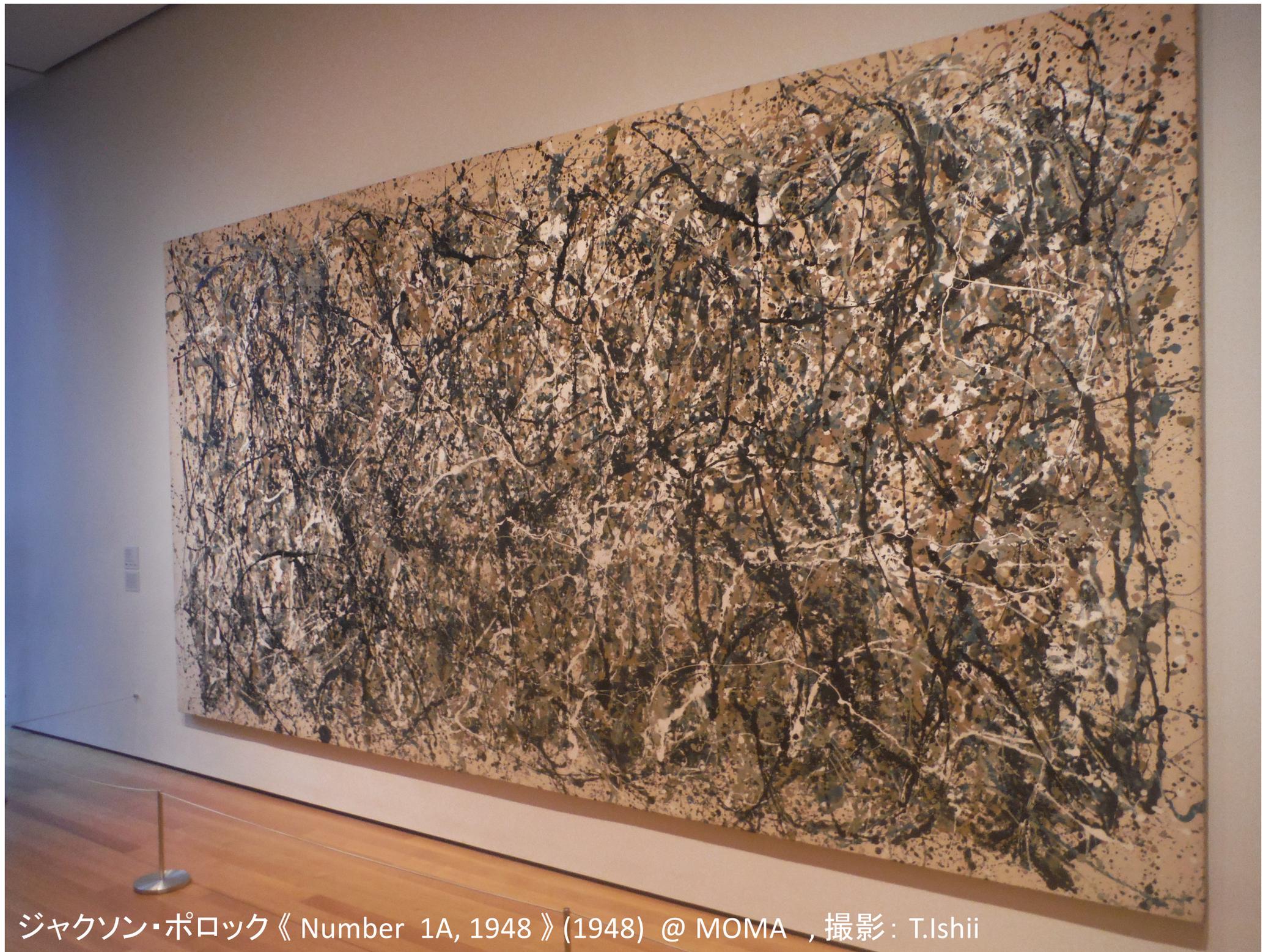
絵画は、その固有の形式的要素「平面性」を自己批判的に追求すべし。



「メディウム・スペシフィシティ」 Medium Specificity ※媒体特性

「素材や媒体に固有の性質のことを示す美学／批評用語。
モダニズムの美術批評の理論的展開において重視され、
特に批評家、C・グリーンバーグの言説によって広まった」

(Web『アートワード, 現代美術用語辞典 ver.2.0』より)



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 (1948) @ MOMA , 撮影 : T.Ishii

Jackson Pollock

American, 1912–1956

Number 1A, 1948 1948

Oil and enamel paint on canvas

Purchase, 1950

Conservation was made possible by the Bank
of America Conservation Project.

ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 (1948) @ MOMA, 撮影: T.Ishii



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii



バーネット・ニューマン 《崇高にして英雄的なる人》 1950-51年 (242.9 × 542.0 cm)

「抽象表現主義」 > 「カラーフィールド・ペインティング」 ('50s頃) の例
「ポスト・ペインタリー・アブストラクション」
「モノクローム絵画」



ジュールズ・オリツキー
“END RUN “ (1967)



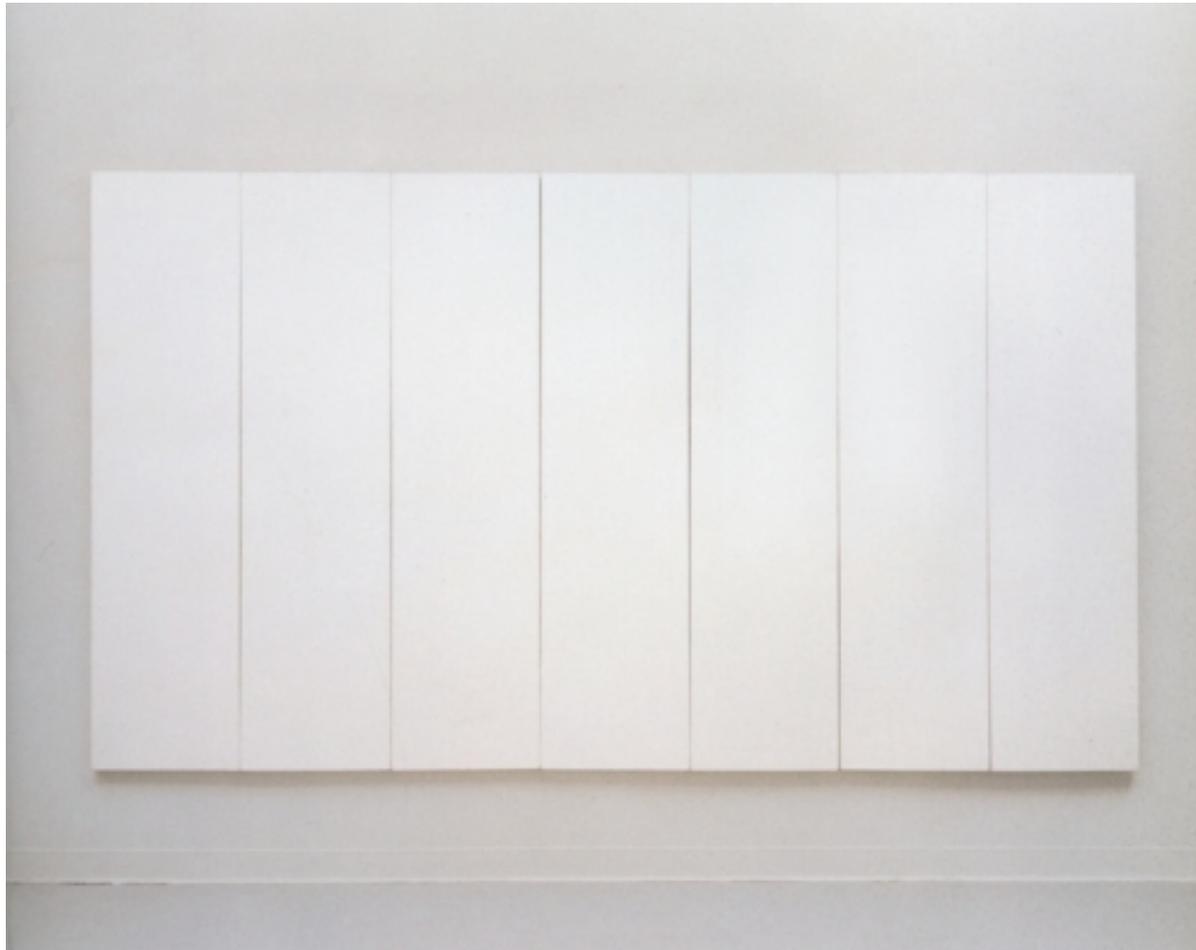
ジュールズ・オリツキー
“BEAUTY MOUTH-TWENTY FOUR “ (1972)

※ グリーンバーグからの評価が高かった作家

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

モダンアートの帰結（絵画篇）



ロバート・ラウシェンバーグ 《白い絵画》1951。 「モノクローム絵画」

Robert Rauschenberg “White Painting” [seven panel], 1951. Oil on canvas, 72 x 125 x 1 1/2 inches.

http://pastexhibitions.guggenheim.org/singular_forms/highlights_1a.html

モダンアートの帰結（絵画篇）



ロバート・ラウシェンバーグ
《白い絵画》1951

<http://canonpluscanon.wordpress.com/2010/03/09/robert-rauschenberg-white-paintings/>

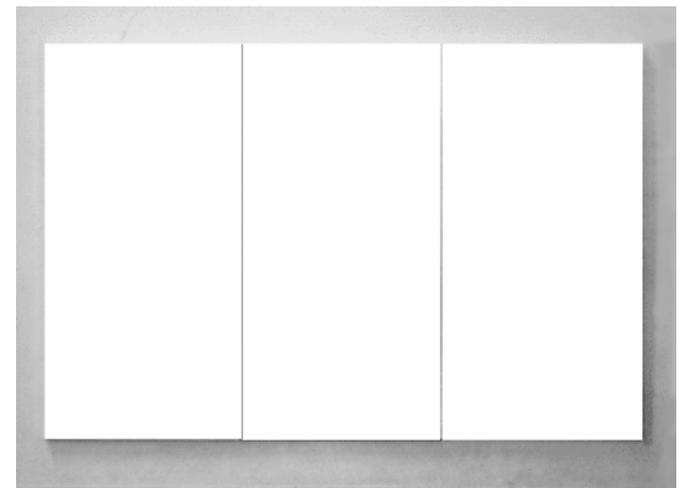
モダンアートの帰結（絵画篇）

「私に **4分33秒** の作曲させたのは、
無響室での体験と、
ロバート・ラウシェンバーグの
《white painting》だった」

ジョン・ケージ『自叙伝』(1989)より

http://johncage.org/autobiographical_statement.html

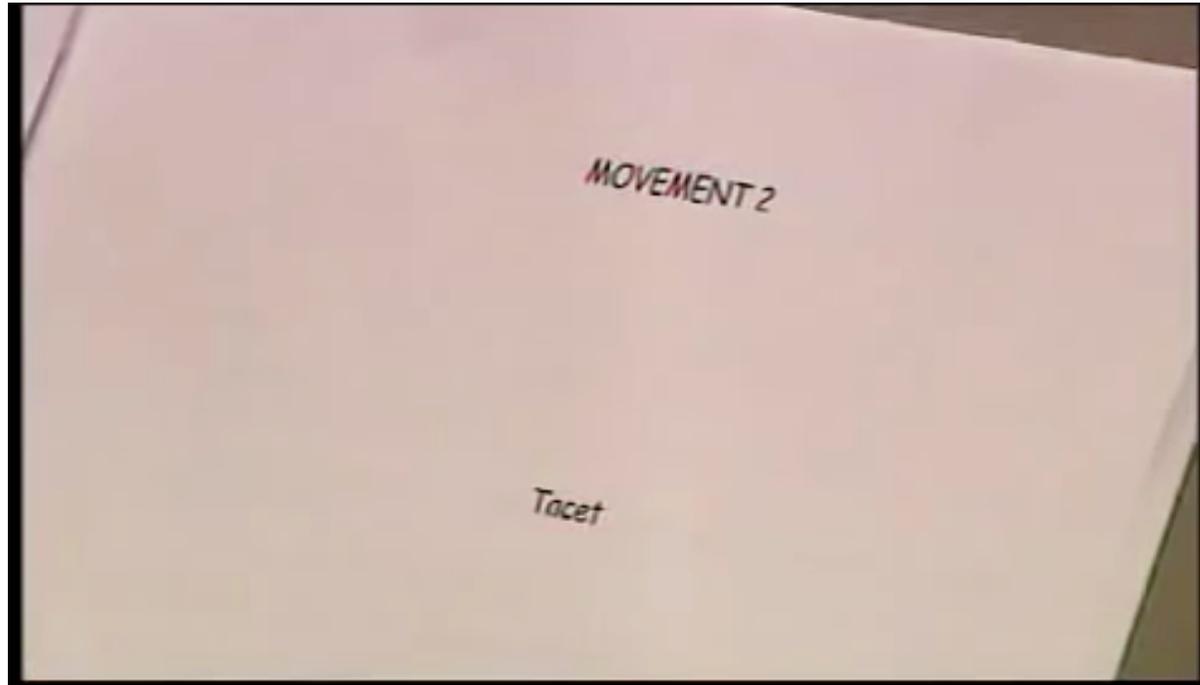
- ※ ここでのように《4:33》の性格を要素還元主義から読み解く例は、たしかに、あまり例をみない。しかしケージ自身の上記の言及からラウシェンバーグ《白い絵画》(1951)との関連は明らかである。さらに、この絵画がロシア構成主義を端緒とする「モノクローム絵画」の系譜と考えられていることから、これが「モダニズム」の帰結と論じ得る。したがって、還元主義の視点からの議論もまた開かれていると考えることも可能であろう。



モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

モダンアートの帰結（音楽篇）

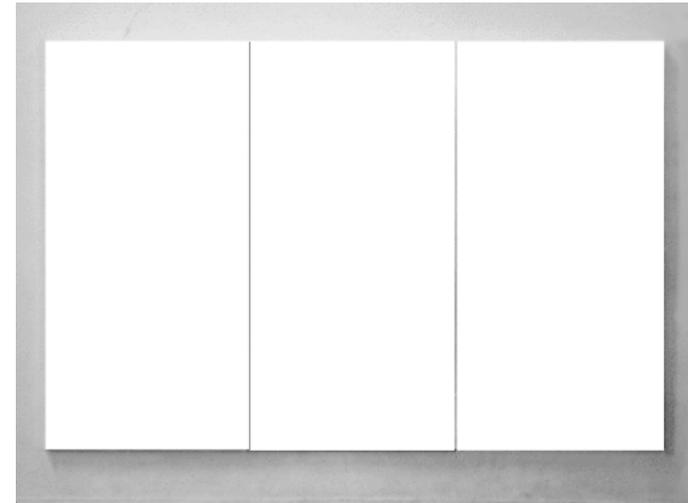


ジョン・ケージ《4分33秒》(1952)

(※ いわば 純化の極地)

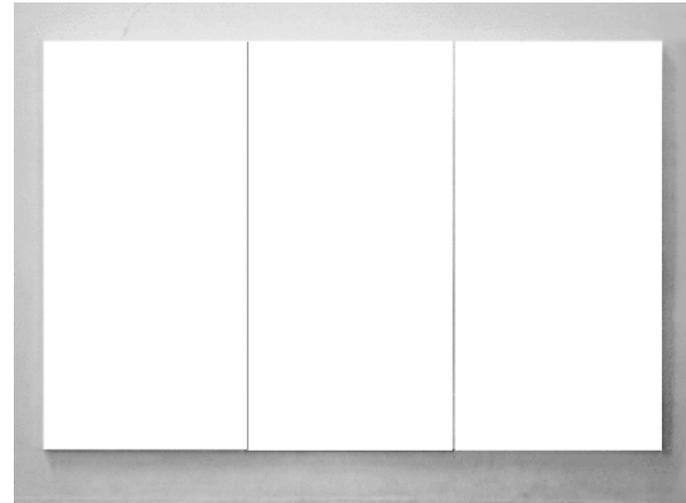
- ・ 3楽章形式
- ・ 第1楽章を33秒、第2楽章を2分40秒、第3楽章を1分20秒
- ・ 全楽章の合計時間 4分33秒で〈演奏〉する
- ・ 楽譜には “tacet” (タセット = 音を出さずに楽章全体で休み) と記されている

モダンアートの帰結（音楽篇）



啓蒙主義に導かれた
「要素還元主義」、「進歩主義」を、究極に、突き詰めた結果、
音楽に音が無くなり、絵画には色と形が無くなった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

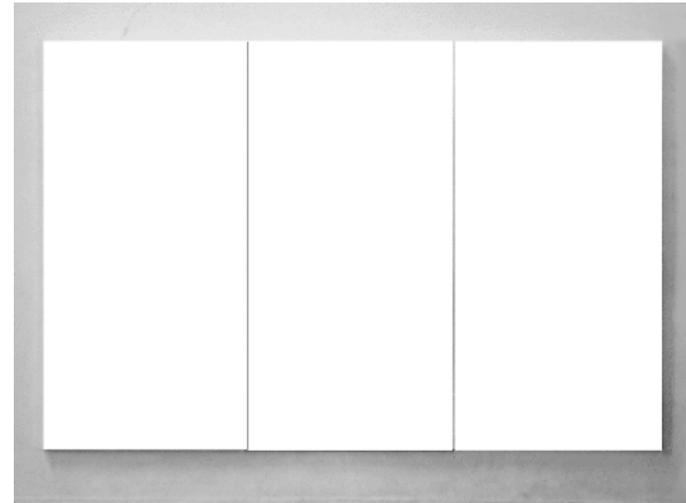


音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

したがって、これ以上の「進歩」は見込めなくなった。

しかしそれは「近代芸術」モダンアートの必然的な着地点であった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

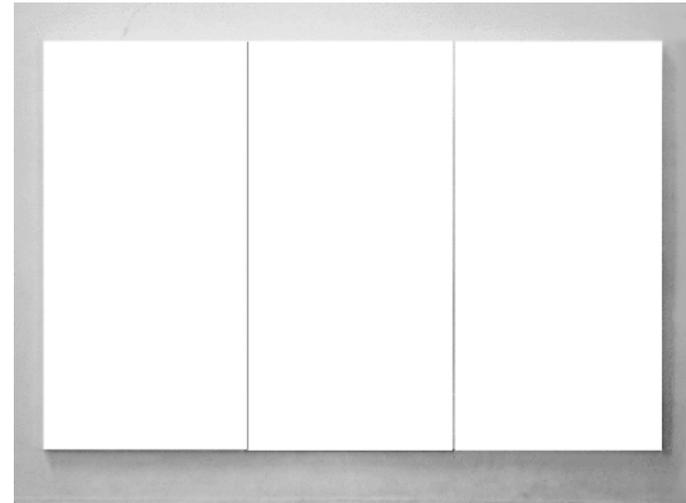


音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

※ これは近代主義の先に「ニヒリズム」を予言した
ニーチェの示した通りの帰結とはいえないか。

モダンアートの帰結（音楽篇）

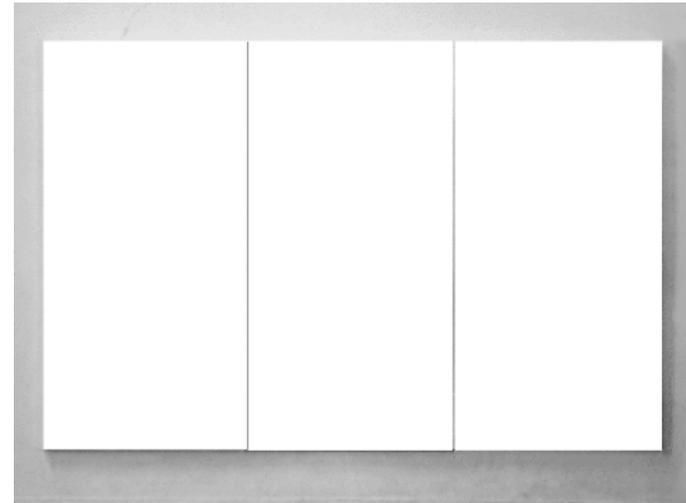
3
近代芸術の
帰趨



ニヒリズムとは「最高の価値が無価値になるということである」

～ フリードリヒ・ニーチェ『道徳の系譜』

モダンアートの帰結（音楽篇）



さて、このような「近代」をふまえて、
「現代」のわれわれはどうする？

3. モダニズムを超えて

～ 現代藝術の論点

(※ ここから先は、今日議論がもとめられる切実な問題であり、
専門家たちによる具体的結論がでていないものなので、授業担当者本人の考えを示さねばなりません)

啓蒙思想の性格： つまり「西欧近代」、「近代藝術」の性格。
つまり 今日、再考すべき藝術的論点。

- **西欧中心主義**

西欧こそが世界で最も進んだ文明であるという考え

- **要素還元主義**

物事 (藝術を含む) の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
→ 物事を細かく区分しようとする考え

- **進歩主義**

新しいことは良いことだとする考え

- **人間中心主義**

人間は科学によって、自然を制御することができるとする。〈自然 vs 精神 (人間の本质)〉の二元論。

先の論点は、すべての人間の文化において再考されるべきもの
(科学、政治、教育、福祉、労働、藝術、、、)

※ ただし、具体的な方向性を見出し、結論づけるのは、至難の技。

※ でも、例えば、考えられる方向性のほんの一端として、、、

※ 映像の中の音楽の可能性

- ・ 近代的 〈藝術〉 音楽 を 批判的に乗り越えるための映像音楽というあり方
 - 音楽が生まれる誘因 をとりもどすこと
(還元・純化・自律化 から、自然な文脈の中に音楽を再定位)
 - 視覚、物語、動作、(等) あらゆる表現要素への視点
それらとの相互関係としての音楽 → 関係性の中での価値創出
 - 映像は多様な文脈を作りうる (「語用論」的な意味の創出の重視)
 - しかし、近代主義における技術的成果を安易に批判するものでもない

「藝術」はどうあるべきか。
一体どのような意義をもつのか？
そもそもそれは必要あるのか？

古代から現代までの先達の足跡をふまえ、

21世紀の美大生として、
みなさんはどう考えますか？

「さしあたりは、われわれ人間が自然の一部でもあることを
認識することであり、ひいては、人間以上に偉大なものが存在
することをわきまえることです。それが美学と結びつくのは、
美がそのようなものだからです」

佐々木健一 (2004) 『美学への招待』 p.222

参考文献，より深く知るために

- 松宮秀治 (2008)『芸術崇拜の思想』白水社
- 佐々木健一 (2004)『美学への招待』中公新書
- 小田部胤久 (2001)『芸術の逆説：近代美学の成立』東京大学出版会
- 国安洋 (1991)『〈藝術〉の終焉』春秋社
- E.ハンスリック (1854=1960)『音楽美論』渡辺護訳、岩波文庫
- F.ニーチェ (1887=1940)『道徳の系譜』木場深定訳、岩波文庫
- 菅原教夫 (1994)『現代アートとは何か』丸善ライブラリー
- 村田誠一 (1999)「近代の終焉? : 芸術的表現の可能性と限界」、神林恒道ら編『芸術における近代』ミネルヴァ書房
- ホルクハイマー& アドルノ (1947=1990)『啓蒙の弁証法』、徳永恂訳、岩波書店
- クレメント・グリーンバーグ (2005)『グリーンバーグ批評選集』藤枝晃弘訳、勁草書房。